
Girl Doll Arms

日野五十鈴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

G i r l D o l l A r m s

【Nコード】

N 4 5 1 6 K

【作者名】

日野五十鈴

【あらすじ】

山間の街に小さな診療所を経営している俺、あらたに・れいじ新谷零時。毎日忙しく診察&治療しながら新型人造人間：BHDの研究もしている。ある日倒れている女の子を拾ってから、俺の日常はトアル疑念の絶えないものとなり…！？ 近未来型医療系SF、ここに見参！！●本作は短編『INABA―178』の大改稿版です。短編を先に読まれるとネタバレになってしまうので、できれば本作を最後までお楽しみください（え）。

【12話完結シリーズ第3段！！】

G D A (1) (前書き)

彼女は、冷たい水の中にいた。

冷たくなって帰ってきた…いや、もう帰ってこない彼女を見て。

それを覚悟している自分に気付き、彼は泣いた。

そして。

彼女が再び目を開けたのは…水の中、だった。

G D A (1)

俺は泣きたい気分だった。

何が悲しくて男2人で水族館。

「…なんでこんなことに…」

山間の町に小さな診療所を構え、毎日忙しく診察あんど治療していた俺は、看護師であり男友達でもある金子かねこに、悲壮感漂う声で打ち明けられた。

「フラれた…ってお前、彼女いたの!？」

「違う。一目惚れした女の子に告白したら、間に合ってますってかわされたんだ」

「…お前、そのコに彼氏いるの、知らなかったのかよ」

「知るわけないだろ。街で1、2回すれ違っただけなんだから」

「なにい!？」

それじゃ告白じゃなくてナンパだろ!？　と言ってみたが、フラれた、と決めつける金子にはどんな言葉も通用しない。

問題は金子が用意していたワンデーフリースで、払い戻すのも面倒だし期日指定は厄介だ。木曜日に暇な奴なんてそうそういるわけではない。

なのに。

「なんでこんなことになっちゃったんだ…」

俺たちは理系の男2人という奇妙な組み合わせで、カップルで込み合う中をウロウロしていた。気色悪いことこの上なし。

珊瑚の飼育展示は色とりどりで綺麗だったし、ジンベエザメもマンタも思ったよりでかくて迫力があった。水槽をぐるぐる回遊するマグロは美味そうだった。そして今、俺たちはイルカちゃんショーを見物している。

「でも隣を見ると、彼女じゃなくて金子だよー」

「なんだよー。じゃあ手でも繋ぐ？」

「冗談じゃない。自分のモテなさ加減を呪ってるだけだよ。单身生活、明日で12年目に突入だからなっ」

「明日30歳！？　へーそうだったんだ。じゃあ何か欲しいもの言いなよ。安いものならプレゼントするからさ」

そう言ってニッコリ笑う金子。ミディアムの茶髪がふわりと揺れる。つくりは悪くないのだが、童顔のせいで少女のように見える顔で…フォーリンラブしそう。

本物の女の子ならね。

だが、騙されてはいけない。こんなに可愛い顔をしていても、コイツは筋金入りの女好きだし、名前も京平きょうへいと立派な名前だ。そこんところは妙に男らしい。

ちなみに俺の名前は新谷零時あらたに・れいじ。由来は生まれた時間から。誰もが見た瞬間『深夜0時』と脳内変換するから、もうちょっとこう、人名らしい漢字をあててくれとも親を呪ったものだ。礼二とか令治とか零士とか黎璽とか。…やっぱ最後のは遠慮します。

「……。お前はさー、顔は充分に可愛いんだから、そのナンパ癖さえどーにかすれば彼女とかできるんじゃないかねえの？」

その可愛い顔した友人は、イルカちゃんを見ながらボソツと言った。芝居入ってる。

「女性患者に手を出して病院を追い出された医者に、僕の気持ちは分からないよ」

「…それを言うか。いや待て、聞き捨てならん。俺は女性患者に手なんか…！」

出していない。だが、病院を追い出されたのは事実だ。以前は都会の総合病院に勤務してたんだけど、断じて追い出されたのはそんな理由からじゃありません！ 多くの担当患者による診察代滞納という、我ながらなんともシヨボい原因が絡んでいる。

そういう金子も、かつてはその総合病院の看護師だった。けれど俺が病院を出る際にそこを辞め、現在は俺と2人で診療所を切り盛り

している。

金子が俺についてきたのは、俺のことを尊敬していたわけでもなく、まかり間違っても俺のことを密かに思慕していたからでもない。理由は多分、…俺たちが密かに行っている研究を続けるため。

20世紀末に自立二足歩行ロボットが開発されてから数十年。テクノロジーの飛躍的進歩は、アンドロイドの量産化を成功させていた。災害救助などの危険な作業や、掃除洗濯をはじめとする面倒な作業は、すでに彼等の仕事となっている。

そんな科学技術をもってしても、彼等に“感情”をインストールする方法の確立だけは未だに成功していなかった。それが実現すればアンドロイドの多方面での活躍が期待されるため、学者先生たちはそのボトルネックをどうにかしようと研究中。

だが、その逆をいこうと研究する人たちも少数だがいる。

つまり、感情を持つ生物を機械化させようというのだ。

俺たちの研究もそれにあたるのだが、方法が他とは少し違う。身体に機械を取り付けるのではなく、脳などの臓器にメスを入れてヒトには不可能な動きを可能にしようというもの。

俺たちはそれを『BHD』と勝手に名付け、呼んでいる。しかも実験対象は専ら死体くんとエコノミーだ。まあ現段階では交通事故で御臨終した小動物が実験台なわけなんだけど。

端から見れば犯罪的な研究だけど、いつか成功させようと心に誓った。

決心したんだ。

「新谷、あーらーたーにつ、ほら海のお友達ショー終わったよ」

「へ？ ああ、ごめん」

気付けばお客さんが次々と席を離れていく。

受付のお姉さんが脇を通る際に『仲がいいですね』なんて言ってきた。そういうのは彼女と見に来たときに言ってくれ。

GDA(2)

水族館のある海から約1時間。すっかり薄暗くなった山間の街には雪が降っていた。これが夜更け過ぎに雨に変わることはないだろうが、どのみち文自体が間違ってる。

(…髪が長くて得したな)

隣の寒そうな首筋を見て、不謹慎にも俺は心からそう思った。

インドアで不精な独り者の髪は、すでに腰のあたりまで伸びてしまっている。普段は邪魔になるので後ろで1つにくくっているが、全く手をつけていない前髪は目を覆い隠すほどまでに伸びてしまった。こうなると僅かにだが保温効果が出てくるので、山間の冬では重宝している。

相棒を家まで送り、俺も家路についた。途中いくつかある雑木林を横切ると、すぐそこに診療所が見える。その一室が俺の住み処だ。

世間じゃ医者が高給取りで通ってるし、開業医の診察料は高いものらしいけど、俺は地域密着型良心経営主義だから、そんな高額な治療費は請求しないでいる。

腕が悪いとか実はモグリだとか医療ミスしまくってるとか、決してそんなことはありませんよ、ええ。

「……、…んん!?!?…」

もうすぐ診療所が見えるかという所で、俺は足を止めた。最後の雑木林を横切る途中、あり得ないものを見てしまったような気がしたからだ。

恐る恐る近づいてみる。そんなハズないと自分に言い聞かせながら。

だが、それは意外にも身近にあったりするのだ。

「…これは…」

これは…腕? しかも、人間…の?

もももしかしてこれって、死体遺棄事件なのか!?

そんでもって俺が第一発見者だったりするのか!?

嫌すぎる。



「…見つけた…」

幼女が呟くと、婦人がパッと振り返る。

「居場所が分かったのね？ どこに？」

幼女が一通りの場所を言い終えると、婦人は身を翻した。

「…シュラ…？」

「ここは私ひとりで行くわ。センカ、後を頼む」



さらに近づくと、まだ息がありました。

倒れていたのはまだ高校生くらいの、髪を赤く染めた少女だった。小柄で細い身体のあちこちに怪我があったが、熱の方はもっと酷い有り様で、診療所に運んでから随分経つのに目を覚ます気配すらなかった。

もう何度目かの氷嚢の取り替えのとき、やっと彼女は目を覚ました

のだ。

「…おはよ」

瞼に隠されていたヘーゼルアイが、俺の顔に焦点をあわせる。

俺は彼女の頬に触れ、逃げられる前に手を離した。

「…うん。熱もだいぶ下がったな。何か欲しいものあれば遠慮なく言えよ。小さいけどここは診療所だから、それなりの処置はできるし。そうだ、キミ名前は？」

赤毛の少女はしばらく宙を眺めて、掠れた声でこれだけ言った。

「……。…イナバ」

名字だけかよ。まあいいや、とりあえず名刺交換。

「稲葉さん、ね。俺は新谷零時。これでも一応医者やってる。それで、よかったら住所教えてくれる？ ご両親に連絡とりたいからさ。どこに住んでるの？ この近く？」

「……。…わからない」

はい？

「分からない、ってそんな…じゃあ電話番号。できれば市外局番から」

だが、彼女はこれにも首を横に振る。念のために他の質問もしてみ

た。

学校、家庭、友達のこと…しかしこれにも『分からない』と首を振る。

試しに九九、世界の首都、文房具の使い方（3色ボールペンとか）を訊いてみたら、こっちは何も問題ない。ふざけてATP剤の説明を要求したら、驚いたことに模範解答が返ってきた。一体いつどこで覚えたんだか。

「…まいったなあ…」

おそらく彼女は記憶喪失だと思われる。自分の名字以外は憶えてないみたいだが、普通に生活する分には困らないだろう。アデノシン3リン酸が分かるくらいだし。

それにしても、これからどうしたものか。

身元が分かるまで預かってもいいが、なにせ男の単身世帯だ。ご両親になんて言い訳、いや説明すれば。それ以前に、もしこんなことが金子にバレたりしたら…。

「おっはー☆」

20世紀末に流行ったらしい挨拶で、タイミング悪くドアが開けられた。

小柄で茶髪で少女顔の看護師だが、この肩書きと外見に騙されてはいけない。こーんな顔してても立派な女好きだし、名前だって京平と立派な男名だ。それはさておき。

「あつれー？ 新谷、その可愛い女の子は誰？ なんか見かけない顔だけど」

まずい。怪しまれてる。

「かつ、金子。あのな？ この子は…」

「あーっ！！ もしかしてその子って、まさかお前の…っ」

俺の言葉を遮って、金子の食指が俺を狙った。

ヤバイヤバイヤバイ！ もう絶対にヤバイ！！ まさかお前、源氏物語の光源氏と紫の上みたいな関係を想像してねーだろーなっ！？

「…お前の妹っしょ？」

へ？

「なーんだあ。妹さん来てるなら、僕にも紹介してくればいいのに。おにーちゃんと違って可愛いねえ妹。あれ？ じゃあなんで病院のベッドに寝てんの？」

「…あ？…ああ。怪我してたし、熱もあったから。な？」

どうやら金子は、稲葉を俺の妹だと思ったらしい。よし、こうなったら妹ということにしておこう。それにしても助かった。内心ホッ、だ。

看護師口調で『お大事に』の後、金子はドアの手前で振り返る。

「そういえば妹さん、名前は？」

兄妹（仮）2人で異口同音。

「稲葉」

「新谷稲葉さんか。可愛いね」

名前決定。新谷稲葉。

なんか1人漫才みたい。

G D A (3)

ウトウトしていた俺の耳に銃声が聞こえたのは、その日の5時過ぎだった。

椅子から落ちて臀部を強く打ち、痛みをこらえながら俺は階段を駆け上った。音の方向から考えて、おそらく現場は屋上だろう。

ぱーんとドアを開けると、そこには人影が2つある。デカイのと、ちっこいのと。

俺はデカイ方を見て絶句した。背筋の伸びた8頭身に、煌めく金髪と超長い美脚。フツーに過ごしていたら一生お目にかかれないような美女がそこに立っていたからだ。

だが…手にしているのは…どのアングルから見ても。

「…ワルサーP38…」

ル○ン三世も愛用中。

ってなんでそんな物騒なもの！？ そりゃ俺だって刃物くらいなら持ってるよ（医療器具）。でも明らかな殺傷装置である拳銃はさすがにダメだって、お姉さ…ああ…。

まずい。金髪美女と目が合っちゃったよ。

「…あのー…どちら様でしょうか？」

超弱気っ！！

金髪美女は“達者な”日本語で答えてくれた。

「わらわはエスエイチユーエルエー、781NBC。シュラでよいぞ」

S、H、U…なるほど、コードネームか。でもなぜその必要が？
しかも『わらわ』って…。

「…その子に…稲葉に、何の用が？」

気の強そうなヘーゼルアイで睨まれたが、銃口はちっこい人影の方
に向けられている。

「おぬしが知る必要はない。わらわはただ、こやつを連れ戻しに
来ただけじゃ」

きつと時代劇で日本語を覚えたんだな。

こやつというのは、ついさっきまで病室で寝ていたはずの稲葉で、
熱が悪化したのかさっきよりも顔色が酷くなっている。

そして頬には何かに傷つけられたかのような赤い筋があり、新しく
できた傷から血が滲んでいた。

じゃあ、さっきの銃声は…！

「…稲葉…?」

返事はない。

稲葉はおぼつかない足取りで、シュラと名乗った美人さんに近づいていく。幼さの残る眼差しが今は鋭利なものになり、爛々と輝く瞳には、シュラしか映っていなかった。

「探したわ、イナバ。さ、帰りましょう」

あ、口調が普通に戻ってる。

「帰りましょう、イナバ」

「……………」

声もなければ返事もない。

シュラは辛抱強く『帰りましょう』と誘うのだが、稲葉は黙ってるだけだった。

睨み付けるヘーゼルアイが、簡単なスイッチひとつで冷酷な色に変わる。

「だったら、仕方ないわね」

仕方ないって、何が？

稲葉の瞳に映る影の、白魚のような指がトリガーを引く。

「！ 危な…っ」

俺が声を出すまでもなく、稲葉はその銃弾を軽々とかわした。

「「なにっ!？」」

含む意味は違うけど異口同音。

次々と連射される銃弾をすり抜けながら、稲葉はアスリート並みの速さでシュラに接近する。もちろん仕掛けは一切ナシ！ ノンワイヤー。ノン合成加工。

(…スタントマンの経験とかあるのかな…)

シュラが弾を入れ換える時間もあるからこそ、稲葉の細い脚でワルサーは蹴り飛ばされ、闇の中に消えていった。すぐさま体勢を整えてから、ハイキック。飛び膝蹴り。をを、後ろまわし蹴り！ 技のキレは黒帯級だ。

「って！」

マジかよ!？

最後に一発、蹴りを腹部に受けて、シュラは数メートルは吹っ飛んだ。

「っ、ちょっと待てよおい！」

落下地点を確認してみるが、眼下にはシュラもワルサーも見当たらず。

ない。

そして、背後からドサツと何かが倒れる音が…。

「！ 稲葉！」

力を使い果たしたエスパー（↑表現古い）のごとく、稲葉がその場でぶっ倒れてた。

駆け寄って様子を見てみると、案の定、熱も怪我也も悪化している。しかし呼吸は規則的で、どちらかというと疲れ果てて眠ってる感じだ。

…あの金髪の美女は何者だったんだ？

いやそれよりも、稲葉はなんでこんなに実戦慣れしてるんだ！？
しかもあのワイヤーアクションみたいな身体能力は、いっどこで身に付けたんだ！？

（…もしかして…）

稲葉を病室に運びながら思う。

もしかして…コイツ、ロ…！？

G D A (4)

パンのトーストされる幸せな匂いで目が覚めた。診察室の椅子で寝ていた俺を、妹が覗き込んでいる。

「おはよう、稲葉…どーしたんだ？ そんなビミョーな顔して」

なにしろ自分のファーストネームを憶えてないもんだから、今現在の彼女の名前は、憶えていた名字をとって『新谷稲葉』。かなり強引。てゆーか、お笑いコンビかよ。

「おはよう…ございます。えっと、いきなりなんですけど、そのお…私…」

ヘーゼルアイがキョトンと俺に焦点を合わせていた。俺の顔に何かついてるか？

「なんといいですか、その…すみません！ 私、新谷さんの顔見てもうしました！！」

「!？」

見られた。

インドアでネクラで不精者、外国文学とコンピュータが好き。そんな俺にも取り柄はあって、親のDNAから“美しい外観”を授かった。

ていた。

だが昔『貴方の隣で彼女やるなんて無理です』とフラれてから、前髪で顔を隠すようになった。だから稲葉にも『決して覗くな』と言っておいた。

…なのに。

「ッ、顔のことは言うなーっ!!」

崩れた顔ならいざ知らず、逆に怒るんだからタチが悪い。

怒りに飛び起きて匂いの正体が分かった。幸せな香りの正体は、テールブルの上に。

「そうでした。朝ごはん、作っておきました。…あの、もしかして和食派でした?」

「…いや、俺も朝はパン派だけど…」

稲葉はパアッと顔を輝かせた。

「よかった。じゃあ私、お掃除してきますね!」

そう言い残して稲葉はスリッパをパカパカいわせて走っていった。

「……………」

俺はやけにトロミの薄いポタージュを啜った。

涙の味がした。

「…まずい」

「何が？」

返事があるとは思ってなかったから、声をかけられて思わずビクッとしてしまう。

「うわビククリしたッ…なんだお前かよおー」

頭を抑えて見上げた先には、総合病院時代からの友人の顔。

「せっかく早朝出勤してきたのに、お前かよおー、はないだろ」

小柄で茶髪で少女顔の看護師が、呆れた様子で呟いた。

誤解の無いように説明しておくが、この肩書きと外見に騙されてはいけない。彼の名前は金子京平、可愛い顔したナースマンにして筋金入りの女好きである。

この山間の小さな町の、俺が院長をつとめる（医者は俺ひとりだが）診療所で、唯一の看護師だ。

「そんで新谷、一体なにがマズイんだって？　なんかヤバイことしたの？」

金子は目をとめた。デスク…の、上に並ぶ朝飯に。

「なにこれ、お前が作ったの？」

「いや、俺が作ったんじゃないや…あ、ちょっと待て、それは！」

時すでに遅し。俺が止める隙もあればこそ、金子は料理のひとつに手を伸ばし口に運んでいた。

しばらく咀嚼を黙々と繰り返してから、何か物言いたげな顔を向ける。

「これ…お前が作ったんじゃないとなると、まさか…」

「…そう。これ全部作ったの…稲葉だ…」

三十路を迎えても現在独身。なにしろ独り暮らしが長いから、一応俺も料理はできる。ビーフストロガノフなんかちょっとしたもんだし、洒落たパスタなんかお手の物だし…なんか自分で言ってる悲しくなってきた…だから可愛い女の子にメシ作ってもらうのは、決して嬉しくないわけじゃない。ない、んだけどさ。

「なんつーか…このスクランブルエッグ、いろんな意味でアタラシイ味だな」

「誉めてくれてありがとうだけど、それ…オムレツ…だぞ？」

「…え…？」

新谷稲葉（仮）作・スクランブルエッグプレーンオムレツに2人して気をとられてると、住居として利用している診療所の一角から爆発音が聞こえた。ドーン、てな感じで。

「そーいえば稲葉さん、さっき僕に掃除機の場所、訊きに来たっけか」

「……。何をどう使えば掃除機で爆発が起きるんだよー!？」

事件現場に急行しながら、稲葉が起こしたもうひとつの事件を思い出していた。

（そーいやアイツ、洗濯機使って自分が泡まみれになったこともあったよなあ…）

そのうえ料理の腕は、殺人的ときた。

GDA(5)

すでに季節は春になっていた。

あの赤毛の少女を妹として預かってから4ヶ月ほど経つが、何一つとして有力な手掛かりを掴めないままだ。

ひょっとして親に勘当されたのかとも考えた。ボロボロになって倒れてたくらいだから、悪い連中と付き合うような生活だったんじゃないかなあ、とくらいは疑っている。

だが真っ赤な髪とは反対に、稲葉はよく気が利いて素直だった。不良少女と呼ばないで、と言わんばかりに優しいし。きっと記憶がないのが影響して、素の人格が出たんだと思う。

こんな良い子を非行に走らせるなんて、親の顔が見てみたい。

雑木林で倒れていたのを保護してから1週間、熱と怪我が完治した稲葉にはひとつ問題があった。

着るものが一切ない。かといってはるばる兄を訪ねてきた妹が、当座の着替えも持っていないのは怪しすぎる。

考えた末に通販で女物を購入することにしたが、下着注文の際にはどうしたもんかとかかなり悩んだ(買ったけどさ)。

とりあえず今は家事を（色々と問題を起こしながら）手伝ってもらって、金子にも妹だと偽って同居しているけど、さすがにそれも長期化すると苦しくなるだろう。

早く次の策を考えないと。

「新谷？」

白衣に着替えた看護師・金子が、処方箋を手に俺の顔を覗く。

「どーしたんだ？ しけたツラして」

「この顔は生まれつきだよ。悪かったな、しけたツラで」

「そうですか。…でさ、ちょっと訊きたいことあるんだけど」

「…なに？」

絶対無敵な白衣の天使の笑顔で。

「稲葉さんってさ…決まった相手とか、いるのかな？」

「……。…はあ？」

なに言ってるんだ、このナンパ野郎は。



「イナバは、間違いなくあそこにいるわ」

金髪の美女…シユラが、テーブルに広げた地図の一ヶ所をとん、と叩いた。

「…それで、イナバは…？」

「…一切の記憶を失っている…しかし、力は喪われていない…。非常事態の時にだけ、イナバは“目覚める”仕組みになってるみたいね」

「…そう…。……」

銀髪の少女…センカは、無言のうちに立ち去ろうとしていた。

「センカ？」

「…今度は、私が行く…」

ええ！？ とシユラは声をあげた。

「…今のイナバ…“特殊能力”も目覚めているかもしれない…。…
だとしたら、シユラが行くのは危険…」

「……………ッ」

一瞬、気の強そうな目でセンカを睨んだが、やがて『そうね』と呟いた。

戦場下の動き…すなわち“身体能力”に長けるよう造られた自分より、幼いながらも“特殊能力”に長けているセンカを行かせた方が無難かもしれない。

「…それに…」

センカは宙を見上げた。

「…『聞こえる』んです…私たちの“創造主”の声が…」

「……………そう…」

シユラには一切聞こえないのだが、センカが言うのならそうなんだろう。

「じゃあ、行ってらっしゃい。気をつけてね、センカ」

「……………」

センカは無言のうちに目を閉じ、無言のうちに一瞬にして姿を消した。

GDA(6)

その晩、扉がノックされる音で目が覚めた。

なにしろ真夜中だったので、急患か？ と俺は急いで戸口に向かい、両開きのドアをいっばいを開けた。だが。

「？」

目の前には誰もいない。本能に従ってすーっと視線を下げていく。ドアの取っ手よりも少し下、腰のあたりでやっと頭が見えた。

白い髪、白い肌、白い服。なんとも色素に乏しい女の子だ。せいぜい8歳かそこらだろうその子は、病的に痩せていて血色も悪い。だがどれだけ見渡しても、保護者らしき人は見当たらなかった。

症状も体質も国籍も不明だが、とりあえず日本語で訊いてみる。

「どうしたのかな？ こんな夜中に。どこか具合悪いの？ お母さん？」

べつに母親でなくてもいいのだが。女の子は俺の質問には答えず、診療所の中に入っていった。ノーコミュニケーションで通すつもりか？

「ちょっと待って、診察室はその部屋…ッ」

女の子の足は予想以上に速かった。どういうわけか診察室の前を通り過ぎても、足を止める様子がない。

どうにか片腕を掴まえた俺に、女の子は虚ろな目を向けた。

彼女の目の色は、稲葉と同じハシバミ色だ。

「イナバを、迎えに来た」

「稲葉を？　だとしてもなんでこんな夜遅くに…キミ、名前は？」

「エスイーエヌシーエー、817PK」

またコードネームかよ！？　S、E、N…何かの電子マネーみたいだが、発音すればセンカってところだろう。それにしても稲葉の（おそらく）知り合いは、こう妙な名乗り方ばかりするのだろうか。
…国際テロ組織？

こんな小っちゃい子があ？

さっきから俺の右脳では、しきりに警告音が鳴り響いていた。厄介な事に関わるな、見ない方がいいぞ、俺。

だが生まれ持った好奇心と、4ヶ月前の事件をきっかけに芽生えた猜疑心が、赤いランプを無視して俺に部屋を覗かせる。

そこには例によって例のごとく、鋭い眼差しでセンカを見つめる稲葉の姿が…。

「また!?!」

考えてみればあの日もそうだった。白い少女と同じようにコードネームを名乗る金髪さんが、やはり稲葉を“連れ戻しに来た”のだ。だが（本人は全く憶えてないらしいが）稲葉はそれを拒否…もとい、返り討ちにした。相手が拳銃を持っていたのに、だ。

てことは。

「帰ろう?」

あ、同じこと言ってる。

「帰ろう? イナバ」

「……………」

声もなければ返事もない。

センカは辛抱強く『帰ろう?』と誘うのだが、稲葉は黙ってるだけだった。

虚ろだったヘーゼルアイが、簡単なスイッチひとつで悲しげな色に変わる。

「だったら、仕方ない」

仕方ないって、何が?

「! う、っわ」

センカとかいう女の子の後ろで、情けなくも俺は飛び退った。かれこれ30年近く生きてきたが、まだナマで見たことのない代物が現れたからだ。

指先まで力を込めれば、火の玉、って作れるんですか!?

炎の色から考えるに、土葬時代によく見られたリンの人魂と同じ仕組みだろう。俺のすぐ目の前にいる女の子の指先から、ピンポン玉サイズのリンの火球が放たれる。

「って、うそっ!？」

すごい、どんな仕組みなんだなんて考えてる場合じゃない。火の玉は稲葉のいる方を含め、四方八方に向かっている。小学生の犯行といえど、放火殺人は大罪なのだ。

「危ない稲葉っ、稲葉ーッ！」

冗談じゃない。あんなのに当たったら100%イモリの黒焼きになっちまう。コンマ数秒間の思考。完全に頭の中がパニックになっているときだった。

「うえ？」

一番最初に放たれた火の玉が、稲葉に届く寸前でVターンしたのは。5個あった火の玉すべてが、何か見えない障壁に当たったかのように跳ね返ったのだ。手っ取り早くいうと、バリア。バリア張れるの!?

「えーっ!？」

その（多分）バリアで跳ね返った火の玉は、次々とそれを放ったセ
ンカのもとへ飛んでくる。

「……っ！」

俺は反射的に目を逸らした。

見たくない。

想像したくもない。

「……っれ？」

だが数秒経って振り向けば、白い少女も火の玉もすでに消えていた。
あるのはあのリンの火球のせいだと思われる壁の焦げ跡と、力尽き
て倒れる赤毛の少女。

「………」

稲葉はほんの少し火傷を負っているが、他に目立った外傷はない。

「………」

何度も何度も自分の頬をつねるが、そのたびに痛みが増していく。

「……。……。……。……ありえないだろ……」

金髪美女シユラのときは、ドーピングとかスタントマン家庭だとか
思えば説明がついた。なんとか理論的に誤魔化す方法があった。

だけど、今のアレはどう考えても無理だ！ 火球やバリアなんてS
Fアクション映画でしか見たことないのにつ！！

…拳銃、俊足、キック技、火球、バリア、…不自然な髪の色。

「…やっぱり…」

いつからか芽生えた猜疑心は、もはや自分では摘み取れない。

やっぱり…コイツ、ロ…！？

G D A (7)

ちょっと早めの海。

「…って、ちょっと早すぎないか？」

俺たち以外、人はほとんどいなかった。

それもそのはず、まだ海開きもしていないのだ。時期的には海水浴というより潮干狩り。かくして俺たちの目的も、海水浴ではなくそのすぐそばにある恩師のところでささやかな研修会。

「にしても、なんで軽井沢とかじゃなくて、こんな南国情緒溢れるところに別荘つくったんだよ新谷いー」

「…知るか…」

それは先生に訊いてくれ。

先生はサーフショップのすぐ近くにある、海が間近に見えるところに別荘を構えていた。

「先生！」

「久しぶりだなー新谷。相変わらず開業しても、女性患者に手え出したりしてるのか？」

「先生それは誤解ですッ!!」

そう。俺がかつての勤務地、都会の総合病院を追い出されたのは、治療費を払いたくても払えない患者の治療費をずっと滞納していたからだ。だからけっしてそんな疚しい気持ちで医者やってませんから!

「冗談だ。…おや金子くん。君も随分看護師らしくなったねえ」

「お久しぶりです先生」

金子は可愛く笑って会釈した。しかし世の女性方よ、証明写真には少女顔で写り、職歴には看護師と書いてあるが、この履歴書一枚に騙されるなかれ。こんな可愛い顔しててもコイツは超がつくほどの女好きだし、名前も京平とワイルドだ。

かくして先生は俺だけでなく、金子にとっても恩師にあたる。というのも目下のところ、俺たちが密かに行っている研究、新型人間間BHDの協力者でもあるからだ。

まあ、脳などの臓器にメスを入れて常人には不可能な動きや能力を引き出そう、な俺たちの研究とは違い、先生は純粋なサイボーグ研究家なわけなんだけど。

「相変わらず仲がいいな。…おや、そちらのお嬢さんは?」

連れてきてるから絶対に先生の目にとまるだろうとは思ってた。俺たちは示し合わせていたとおりに言い繕う。

「新谷稲葉。俺の妹なんですよ。な?」

「ね？ あら：お兄さん」

ちよつと危なかった。

「ほーう、随分と聡明そうな妹さんだ。なら私の話も分かるだろう。しばらく新谷と金子くんをお借りしたい。研究のために大事な話があるのですね」

「はい。承知しました」

「なんならデッキで海でも眺めてるがいいよ。下手くそなサーファ―気取りが、波に吞まれてるところが見れるから」

稲葉はちよつと笑って頷いた。

そして俺たちは、先生の研究室へと入っていったのだ。



「やゝ今回も長くなっちゃったなあ」

先生の特別の計らいで、俺たちは先生の別荘に宿泊することになった。もちろん、稲葉は個室で俺は金子と相部屋だ。金子がベッドに横たわりながらポツンと言った。

「僕さあ泣かしちゃったよ」

「？ 誰を」

「稲葉さんを」

まさか。

「まさかお前、もう手を出したんじゃない!?」

「やだなゝ親友を信用してよ。いくら僕でも親友に無断で、妹さんにコクったりしないよ。ただちよーっと異性関係が気になって、『彼氏とかいるの?』って訊いただけ」

.....なに!?

「そしたら急に泣き出しちゃって...なんか悪いからそれ以上詮索しなかったけどさ。僕、ひょっとしていけないこと訊いちゃったかな...」

「...訊いちゃってるよ」

稲葉には記憶がない。日常生活をこなすには何ら問題ないが、自分の身の上のことをまるで憶えていないのだ。もちろん、交遊関係など憶えているはずがない。

（しかし泣き落として回避するとは…）

俺の妹を演じるためとはいえ、涙を武器に使うとは。

（…やっぱ土壇場になると女は強いな…）

波の音を聞きながらしみじみ思った。

G D A (8)

夜もすっかり更けてしまって、相棒はビールを飲んでさっさと寝てしまった。小柄で少女顔の看護師のイビキが、『スヤスヤ』ではなく『グーカーッグー』なのはだろう。

俺はというとなかなか寝付けず、ベッドで月の行方を辿っていた。

夜半に喉が渴いたのだが、水差しの中身は空っぽだった。上着だけ羽織って調達してこようと、ベッドから降りてクローゼットに足を運ぶ。

「…あれ…？」

ふと外を見ると、稲葉がベランダから外を見ていた。夜風に揺れる赤い髪。

「…眠れないか？」

声をかければ、弾かれたように俺を見る。

「はい…新谷さんですか？」

「まあな」

「……………」

「……………」

しばらくは波の音と金子のイビキ以外、聞こえなかった。

不意に、稲葉はしょぼんと沈んだ顔をした。

「…金子さんに、彼氏がいるのか訊かれました」

ザブーンと、波が一際大きな音をたてる。

「ああ、それで沈んでたのか。…ごめんな」

ザブーン。

「いつ、いえ。そうじゃありません。…私はただ…」

「…ただ？」

「このごろ、不思議な気持ちになるんです。無くした記憶を取り戻そうとすると、胸がぎゅうっとなるんです。これはなんなのでしょうか」

俺はハッと稲葉を見たが、稲葉はただ海を見ていた。

「…私のすべきことは、早く記憶を取り戻して、元いた場所に帰ることです。こちらにご厄介になって、もう半年が経ちます」

「……………」

「でもなぜでしょう。なんだか、何も思い出すべきではない気がするんです。記憶の断片を見るたびに、胸が苦しくなってしまうような感じです。…これは、なんなのでしょうか」

俺は内心、ぎょっとした。稲葉は記憶を取り戻しかけている。

「い、稲葉。そんなに焦らないことだ。記憶はゆっくり取り戻していけばいい」

「これ以上、新谷さんにご迷惑おかけできません」

「なに。俺は独り者だから、問題ない」

問題は稲葉のご両親と会ったときだけだね。

稲葉は途方にくれたような、困ったような顔をした。

「…新谷さん…」

「…零時でいいよ」

「え？」

俺は噛み締めるようにして言った。

「零時で、いい」

そんなにかしこまるなよ、稲葉。

お前は俺の妹だろ？



稲葉は『おやすみ』の挨拶をすると部屋に戻り、俺もベランダから室内に戻った。

しかしまだ眠れそうになく、まだ少し海風の冷たい砂浜を歩こうと服を着替えた。

金子のイビキは相変わらず『グーカーッグー』だった。

いい夢見ろよ。

海も空も真っ黒で、気を抜けば呑み込まれそうなくらいだった。

てくてくと砂浜を歩いていくと、波が足跡を消しに来るかのように押し寄せる。

…出し抜けに、パタリと海風が絶えた。それと同時に波の音もやむ。俺は後ろを振り返り…。

「…な…っ…!？」

立ちつくした。

「…ほーお、よくぞ気がついた。褒めてつかわす」

稲葉に撃退されたはずの2人、金髪美女・シユラと白い少女・センカがそこには立っていた。

シユラは偉そうに金髪をかきやる。

「して、そなたが新谷零時か？」

「……………」

「…新谷零時かと訊いておる」

「……………」

「ッ、耳がないのか貴様！ カッコつけてるわらわがバカみたいではないか。何か言わんかー!!」

そこでようやく俺も我に返った。

「あ、ああ。新谷零時だ。…ってなんで知ってんの!？」

「ならばひとつ忠告しておく」

シュラは目の色もろくに変えずに続けた。

「…稲葉を黙ってわらわ達に渡すがよい」

「なん、で…？」

それまで黙ってシュラの服の裾にしがみついていたセンカが、たどたどしく口を開く。

「イナバは、人間であって人間でないから」

「…はあ？ それって…」

「センカの言葉の通りじゃ。ゆえにそなたの手元に置いておくには危険すぎる」

そして、稲葉が眠ってる別荘に目をやった。

「感謝するんじゃない。ここは人目が多すぎて悶着は起こせぬ。しかし、じきにイナバを連れ戻しに来よう」

「…あんたらは…稲葉と、どういう関係なんだ…？」

「あなたの知る必要のないこと」

「…さ、帰りましょう。センカ」

そしてくるりと背中を向ける。

「おい！　ちょっと待てよッ！」

「…今に楽しみにしておくんじゃな」

そう言うと、唐突に海風が、今までやんでいた分をまとめて吹き出したかのように激しく頬を打った。

反射的に目を閉じて腕で庇う。次に目を開けたときには。

「…っれ…？」

…まだ冷たい海風が肌を撫で、波の音がザブーンと聞こえた。

さっきまでいたはずの2人は…いつの間にか、姿を消していた。

G D A (9)

先生の別荘から帰った矢先、俺は金子に呼び出された。

「なんだよ」

「ちょっと…稲葉さんのことなんだけどさ…」

『イナバは、人間であって人間でないから』

浜辺での、例の2人の言葉が気になったが、俺はおとなしく金子のあとをついていった。

連れていかれた先は、俺たちがBHDの研究所として使ってる診療所の一室だった。

「ちょっとこれを見て」

そう言って金子が指し示したのは、一枚の分析写真だった。

「…これは…」

「稲葉さんの髪の毛だよ」

俺はハッとして金子を見た。彼にしては珍しく、目が怒りに燃えている。

「稲葉さん、新谷の妹じゃないでしょ」

「!……………」

「どうして嘘ついたの?」

顔が似てないから、いずれバレるだろうとは思っていた。

「…すまない…」

「……。で、稲葉さんの髪の毛だけど…」

金子は話を戻した。

「見て分かるとおり、キューティクルの上から染めたという形跡がない。むしろあれは、カツラに近い」

「……………」

「けどカツラじゃない。どちらかと言えば、人工の髪の毛を植毛したと見える。けど、何億本もの色付きの髪の毛を、わざわざ植毛する理由はない…」

そして…と金子は小瓶に入った皮膚片のサンプルをポケットから取り出した。

「稲葉さんが寝ている間に、皮膚を採取させてもらった。あと血液もね」

「……………」

「稲葉さんの皮膚は移植用の人工皮膚だった。頭、腕、脚、あらゆるところを検査しても、やっぱり結果は同じ」

「…稲葉が…アンドロイドかサイボーグだとも言うのか…?」

「話を最後まで聞いてよ。…確かに稲葉さんには人工的に作られた箇所が多い。でもそれは外側だけだ。血液を採取して先生の研究所で調べてみたけど、構成成分は人間と何ら変わらない」

新谷、と金子は科学者めいた顔で現実を突きつける。

「僕たちの実験でも、体が腐敗しないように皮膚組織や毛を新しく移植したよね」

「ああ…。…まさか…」

金子はニッと笑った。

「新谷、…いつの間に稲葉さんを“創った”の?」

「!?!」

その意味を悟った俺は瞬間、震えた。

まさか。

「…お、俺じゃない…」

すると、金子はあからさまに長息した。

「だったら」

次の言葉は分かってる。

「どこの誰かは知らないけれど、僕たちより先にBHDを…死体から稲葉さんを、つくりあげたんだね」

「…うそ…」

その声は俺のものじゃない。もちろん、金子のものでもなかった。

「…稲葉…？」

ぱたぱたとスリッパで駆け去る音がする。

俺は扉を目一杯開いた。

「稲葉っ！」

稲葉は診察室の前を、受付の前を通り過ぎ、スリッパのまま外に走り去っていった。

俺は茫然自失としてその後ろ姿を見ていた。



稲葉はめちやくちに雑木林を突っ切っていた。

『どの誰かは知らないけれど、僕たちより先にBHDを…死体から稲葉さんを、つくりあげたんだね』

もうどこをどう歩いたかも分からず、気づけば雑木林の奥の方へ入っていた。

稲葉はろくに考えもせずに、1本の樹に背中を預けた。

「…私、死んでない…っ」

雨が、降り始めていた。

「…創られても、いない…っ」

雨の音に、稲葉のすすり泣く声がまじる。

気の済むまですすり泣くと、稲葉はポツリと声を出した。

「…金子さんに、とうとう嘘がバレちゃったなあ…」

稲葉は口内である言葉を呟いた。

「…B H D、か…」

その瞬間。

悪寒にも似た寒気が背筋を這い上がり、涙で凝っていた頭の中が一気にクリアになった。

「…B H D…」

稲葉はその言葉を脳内で反芻し、…全てを、思い出した。

自分が何者であるのか、何のために存在するのか。

…なぜ、自分が“ここにやって来た”のか。

G D A (10)

彼女は、冷たい水の中にいた。

冷たくなって帰ってきた…いや、もう帰ってこない彼女を見て。

それを覚悟している自分に気付き、彼は泣いた。

そして。

彼女が再び目を開けたのは…水の中、だった。



死者の意識がどこに行くのか知る者はいないし、ましてやそれが“生き返り”ならなおさらだった。

命も意識も、彼女の中に唐突に再生した。

目覚めたとき、彼女は円形の台の上において、頭の中には何も浮かん

でこなかった。

自分が何者であるのか、何のために存在するのか。それを知るすべを持っていなかったのだ。

力の入らない足を動かすと、足の先に湿った床とガラスの欠片が触れた。

ガラスはつい先程まで彼女を抱いていた殻だった。床にひろがる水は、つい先程まで殻の中に満たされていたものだった。

彼女はほんの少し前に殻の…装置の中から孵ったのだ。彼女を抱いたガラスは彼女に意識が宿ると同時に爆破し、割れた。

「I N A B A ―178、目覚めました」

不意に声が聞こえて、彼女は視線を上げた。

室内には機械と、白衣を着た数人の人間たちが彼女を見ている。

手前にいた壮年の男が、満足げに何度も頷いていた。

「新谷、ついにやったな！」

茶髪の研究員が、手前にいる壮年の男に言った。

「これでBHDの製造技術が確立したぞ」

ふむ、と新谷が呟いた。

「前の生の記憶があるか定かではないが、これからはイナバと呼ぶことにする」

「…イナバ…」

「そう、イナバだ。…名をたまわるのは、お前の使命が重いからだ。よく覚えておけ」

彼女は…イナバは頷いた。何が重いのか、言われても全く分からなかったが。

新谷はふっと翳りのある笑みを浮かべた。

「さあ。これからお前の力を存分に発揮するといい！」



新谷には、1人の娘がいた。

しかしその娘は16歳のとき水難事故で溺死し、遺体は妻を亡くしたばかりの新谷のもとへと運ばれた。

しかし新谷は娘の遺体を茶毘にすることを拒み、研究所：BHDの開発施設へと運んだ。

娘を生き返らせるために。

20世紀末に自立二足歩行ロボットが開発されてから数十年。テクノロジーの飛躍的進歩は、アンドロイドの量産化を成功させていた。災害救助などの危険な作業や、掃除洗濯をはじめとする面倒な作業は、すでに彼等の仕事となっている。

そんな科学技術をもってしても、彼等に“感情”をインストールする方法の確立だけは未だに成功していなかった。それが実現すればアンドロイドの多方面での活躍が期待されるため、学者たちはそのボトルネックをどうにかしようとしていた。

だが、その逆をいこうと研究する人たちも少数だがいる。

つまり、感情を持つ生物を機械化させようというのだ。

新谷の研究もそれにあたるのだが、方法が他とは少し違う。身体に機械を取り付けるのではなく、脳などの臓器にメスを入れてヒトには不可能な動きを可能にしようというもの。

彼らはそれを『B i o m i m e t i c s H u m a n i z a t i o n D o l l 』略して『BHD』と名付け、呼んでいた。

そして、それは完成した。

それが彼の娘：INABA―178だ。

BHDの確立により、新谷は巨万の富を得ることになる。

INABA―178をもとにBHDは多方面で活躍し、それに並行してBHD自体も次々と進化を遂げていった。

当初の目的どおり、確かに新型人造人間は“多方面での活躍”という問題をクリアしたのだ。

：しかし、人間の欲はキリを知らない。

BHDは災害救助や家事手伝いといった使い道だけでなく、兵器としてもまた開発されていったのだ。

各国はこぞってBHDの身体強化、能力開発に精を出し、今や戦場に1体はBHDが駆り出されることになった。

そして、この時代の暗黒がある…。



「…先生…」

イナバは新谷の背中に声を投げた。

「なんだい？ イナバ」

「…私は、生まれてきて良かったのでしょ…」

自分をもとに様々なBHDが生まれ、兵器として使われ、そして第三次世界大戦はとどまることを知らない。

「…私のせいで、今日もたくさんの方が死んでいます…私は、生まれてこない方が良かったのではないでしょ…」

「なにを言うかと思えば」

新谷はイナバに近づいた。

「それは神のみぞ知るところだろう。…もったもった“こうなることを分かって”お前を造り上げ、そして成功したのだから、神もそれを許したことになるんだろうがね」

イナバの頬がカアツと紅潮した。恥じらいではなく、怒りだ。

「…先生は、私たちBHDが兵器として使われることを予想していたのですか…」

「いずれそうなるだろう、と思っていたに過ぎないがね」

「…先生は、悪魔です…死神です…」

「大袈裟な…おい！ なんのマネだ…！」

イナバの両手が高々と挙げられたかと思うと、その手の中央には電気の走る光球がパチパチと音をたてていた。

「…先生は、悪い人です…」

そして光球が研究所内を満たし…。

（どうして、私なんかをつくりだしたのですか）

…研究所は、爆音と共に無と化した。

そのときの爆風に飛ばされたかのように、イナバは空を駆けていた。どこへ向かうのかも決めずに。どこへ向かうのかも分からず。



…目を開けると、一切の記憶が消えていた。

ここがどこなのか、自分は誰なのか、まるで思い出せなかった。

そして、目の前に現れたのが。

『…おはよ』

若き日の父…創造主である新谷零時であった。

G D A (11)

俺は藪の中を突っ切っていた。

雨にぬかるんだ地面に稲葉の足跡がある。俺はそれを頼りに稲葉を追いかけていった。

「稲葉ーッ！！」

返事はない。

足跡を辿っていくと、一本の木に背中を預けて、胎児のように丸くなってる稲葉を見つけた。

「稲葉！」

ハッと、稲葉は俺を見上げてきた。

その顔を見て不覚にも俺はドキッとした。なぜだか罪悪感で一杯になる。

「…零時さん…」

…稲葉は、ヘーゼルアイに一杯涙を浮かべて泣いていた。両頬には涙の伝った跡がクッキリ残っている。

「…稲葉…」

「…零時さん…っ」

そして、また泣き出した。

「私…全部思い出して…私、は…人間じゃなくて…あと私たち…」

「何も言っなっ!!」

俺は稲葉を抱き締めた。

「…零時さん…?」

「…ごめんな稲葉…本当にごめん…ごめん…」

雨はまだ、やみそうにない。



とある会社の会議室に、数十人が集まっていた。ただひとつ言える共通点は、みなBHDだということ。

そこでは、INABAのことについての報告がされていた。

そしてそれを聞き終わると、ひとりが口を開く。

「∴SENC Aが、失敗？」

それに続いて、何人もが言い始めた。

「まさか、INABAの“特殊能力”にプログラミングされていないものがあったと？」

「それはありえませんか。INABAは私たちの基本プログラムしか持っていないはず」

「そもそも、SENC A程度のBHDにINABAの“保護”を任せるのが無謀だったのでは？」

など、そんな発言がされたところで。

「けれど、記憶喪失中のINABAなら、危険時以外に機能が再発することはない」

そう冷たく言い放った者がいた。

今まで騒然としていたその場が、一気に静まり返る。

言い放ったのは、SENC Aの保護として行動を共にしていたSHULAだった。

「でも、今後このようなことが何度もあつたら…」

「その前に決着をつける」

SHULAは会議室のテーブルに地図を広げた。

「INABA―178は間違いなく、まだBHD研究段階の新谷零
時邸に保護されているわ」

ごくっ、と誰かが唾を飲んだ。

「INABAの記憶がよみがえったら厄介なことになる…その前に
手荒でもいいから“保護”するのよ。たとえ街ひとつ焼き払ってで
も」

さあ、とSHULAはハシバミ色の目を輝かせた。

「今度こそINABAを我らが手に迎え入れる！」



「……………」

「……………」

「……………」

…稲葉から“思い出した記憶”を聞いた俺たちは、何も言葉を見つ
けられなかった。

「……………」

「……………」

「……………」

「…そういうことって…あるものの、かなあ…？」

「…本人がそう言うんだから、そうとしか考えられないだろう…」

「…新谷、よかったな。近いうちに結婚できて、こんなかわいい娘
を授かってさ…」

「…問題はそこじゃないだろ…」

そう、問題はそこじゃない。

「…じゃあ、稲葉を“迎えに来た”っていう金髪美女や白い女の子
も…」

稲葉は首を縦に振った。

「私と同じBHDです。最新型や歴史研究用のBHDには、時をかける能力が備わっています」

「で、稲葉さんもその能力を使って、無意識下で過去の父親に会いに来たってわけ」

すごい。俺たちの研究はとんでもないところまで発展してる。稲葉は宙を見ながらポツリと呟いた。

「：彼女たちは、私がこの時代でモルモットにされないようにと“保護”しにくるはずです。おそらく、街ひとつ焼き払ってでも」

「へー…ってなにこの説明！？ ゲームか！？ ゲームにしたって変だろう。人間vs新型人造人間って、いったい何十年前の設定のRPGよ!？」

「まあまあ落ち着きなよ新谷」

「落ち着くか！ てかお前はもうちょっと緊張感を持て!!」

そう叫んでから、俺はデスクに肘をついて額に手を宛がった。

（はあ…何この状況。常識破りも甚だしいし。…そういえばRPGって、主人公が状況をのみ込んだあたりで戦闘に突入するよな。もし俺のジョブが主人公でこの状況がRPG仕様なら、そろそろ…）と。

俺の頬を、何かが掠めた。しばらくすると掠めた部分からじわじわと痛みが広がってきた。そして生温かい液体が頬を伝う。

「…な、何だ今の…」

（もしかして、マジ戦闘突入？）

『新谷零時ヲ始末スルヨウナコトハスルナ。I N A B Aノ保護ニ尽力セヨ』

空から声が降ってきた。

と思ったら、診療所の屋根が一瞬にして吹き飛び、数多くのUFOタイプの円盤が飛び回っていた。

「って俺の診療所がー！」

「問題はそこじゃないだろ新谷ー！！ お前が創造したんだろ！？
なんとかしろよ！」

「何年先の話だと思ってんだよー！ なんとかできるわけないだろー！！！」

稲葉がぴよんと椅子から飛び降りた。

「私が足止めます。零時さんたちは町の人に、安全な場所に避難するよう呼び掛けてください！」

闘いが始まった。

G D A (12)

闘いが始まった。

稲葉は手近にあったブーメラン状の天井の破片を手にとつと、それを空に投げ飛ばした。

ギョルギョルと回転して破片が円盤を追う。円盤はそれを避けるような動きを見せるが、ほとんどが避けきれずにブーメランに破壊され、空中でボムツと爆発した。その爆風で破片を避けようとしていた円盤の軌道がずらされ、次々と破壊されていった。

人間業じゃない。いや、稲葉はすでに人間じゃないんだけど。

軍鶏の雄みたいに雄叫びをあげて襲いかかってくるBHDには、殴る蹴るなどして応戦した。

バシツと、ブーメラン状の破片が手元に戻ってくる。

「すげ：BHDってこんなことできんの？」

「創った本人がそれを言う？ あ、稲葉さん前！」

とても実戦用とは思えない子供のBHDが、俺たちに向かって光の球を放ってくる。

しかし稲葉がバリアを張る方が一足早く、光の球は俺たちの目と鼻の先でVターンした。

子供型BHDは避けるように目の前から消え失せ、代わりに光の球は背後の戦車を爆破して消えた。

『新谷零時ト金子京平ハ傷ツケルナ。I N A B Aノ“保護”ニ集中シロ』

「……………ッ！」

稲葉の言うとおりに、俺たちは町の人に避難するよう忠告しておいたから町人に身の危険はない。

だが、円盤や戦車や戦闘機やらの猛攻によって、街は灰塵と化してしまった。

雑木林が燃えていく。

街が破壊されていく。

「…これが…BHDの力なのか…？」

俺の呆然とした声に、稲葉は悔しそうに返答した。

「…そうです。これが兵器として開発されたBHDの力です…」

こんなのが戦いあってたら、街どころか国全部がブツ飛びそうだ。

そして未来ではBHDが兵器として開発されて、国規模で戦争して

るのか。

それを、俺が？

俺が創ってしまったのか？

「…どうにか、ならないのか？　これ」

「これ、とは」

「どうにかして、あいつらを止めることはできないのか？」

「なに言ってるんだよ新谷！」

俺はぎゅっと手を握りしめた。爪が食い込んで痛みが生じたが、そんなことはどうでもよかった。

「このまま稲葉さんを大人しく渡せと言うのか！？　渡したら稲葉さんがどんな目に遭うか…いや、もしかしたら兵器として利用されるかもしれないんだぞ！？」

「ッ、でも…！」

雑木林が燃えていく。

街が破壊されていく。

俺のせいで。

俺が稲葉を、私的感情でBHDとして生き返らせたせいで。

「…もう…」

俺のせいで！

「もうやめてくれーっ！！」

俺はいつの間にか走り出していた。

「新谷！？」

「零時さん！！」

なぜ自分が走っているのか分からない。ただ、俺は非科学的な攻撃の渦中に向かっていった。

俺になにができる？

現に、俺は…。



零時は、非科学的な攻撃の前に倒れた。

稲葉めがけて放たれた光球に直撃し、そのまま意識を手放した。

「新谷ーっ!!」

光が収まると、そこには長い髪も無惨に散り、白衣もボロボロに焼き焦げた零時の姿があった。

「零時さん!!」

稲葉が慌てて駆け寄る。すでに虫の息だった。

ここにきてようやく、稲葉は自分の体が少しずつ消えていつていることに気づいた。

「……………!!」

「…痛みはある？ イナバ」

そう見下ろしてきたのは、センカを引き連れたシュラだった。

「……。…いいえ」

…シュラやセンカとは違い、イナバは零時の実の娘だ。父親である男がここで死ぬということは、未来において自分の存在がなくなるということ。

自分の体が少しずつ欠けていくたび、零時は不帰路へと近付いていく。

「…新谷先生を、治してあげましょうか」

ハッと、イナバは顔を上げた。

「私たちには貴女が必要な。こんなところで消えてしまつては困るわ。…新谷先生を治して、先生と金子研究員から貴女に関する記憶を消す。そして私たちは帰るの。あるべき場所へ」

「……………」

「悪い条件じゃないでしょ？」

シユラは微笑んだ。人造された者だからこそ可能な、綺麗すぎる笑みで。

「センカ」

裾にしがみついていたセンカは零時に近づき、何かヒーリング効果のある光球を零時に振り降ろした。途端、イナバの体が徐々に再生されていく。

「さ、帰りましょう。イナバ」

「……………」

イナバは無言で立ち上がった。

「稲葉さん！」

そう京平に呼び止められ、イナバはそちらを振り向いた。

「…金子さん」

「は、はい…」

「BHDの研究…道を誤らない程度に、頑張ってくださいね。あと、先生をよろしくお願いします」

もちろんその言葉は、京平の記憶に残らないだろう。

そして、街全体が光に包まれた。



「…に…たに…」

誰かが俺を呼ぶ声がする。

「新谷っ」

「うわあっ！ か、金子か。あービックリした」

俺は自室のベッドから飛び起きた。いつもなら診察室で寝こくるのだが、さすがに山間の真冬で毛布ナシはキツイ。

金子は『はああ』と深い溜め息をついた。

「もうすぐ開院だったのに、こんな時間まで寝てるんだもんない」

「ホントだ！ やっべ」

クローゼットから白衣を取り出しながら、俺はぼんやり思った。

診察時間が始まっちゃう。

それから記憶の襞の内側で、懐かしくも哀しい声がこだました。デジャ・ヴというやつだろう。切なる願いを湛えた声。

『BHDの研究…道を誤らない程度に、頑張ってくださいね』

「…決めたんだ。永世平和主義だって」

突然の言葉に、金子は呆れたような笑みを浮かべた。

「なんだよいきなり。そんな良心的なこと」

当たり前だろう？

医者が良心的じゃなくて、どうするってんだ。

了

G D A (12) (後書き)

ご愛読ありがとうございました。

m (m

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4516k/>

Girl Doll Arms

2010年10月13日13時42分発行